

(こびとの囁き) 「まっ暗」書き直し改題



冷たい雨がそぼ降る、ある冬の日の夕方、庭に面した縁側の沓脱石（くつぬぎいし）のそばに、どこから落ちてきたのか、まだ子供のすずめがびしょ濡れになって横たわっていました。

縁側の奥にあるお便所から出てきた小太郎君は、たまたまそれを見つけたのですが、見るとまだ少し羽が動いているようにも見えます。それが、風のせいなのか、自力なのかは分かりません。

しかし、小太郎君は「まだ、生きていたら」とばかり、咄嗟に裸足のままで冷え切った庭に飛び降り、そのすずめを拾い上げました。小太郎君は手のひらの中にかすかなぬくもりを感じました。

「まだ、生きている！」
それで慌てて縁側に面した八畳の間に駆け上がると、ひとまずアラジンの石油ストーブのそばにすずめを置きました。

その後、ドタドタと廊下を駆けて台所に行き、お母さんに事情を手短かに説明してタオルを借りてくると、ずぶ濡れになっているすずめをなるたけ驚かさないように、やんわりとくるんで水気をぬぐい取りました。

それから、和菓子の入っていた空箱を持ってきて別の乾いたタオルをその中に敷くと、両手のひらで包むようにしてすずめをその上に置きました。

その夜、夕ご飯もそこそこに、小太郎君はすずめの傍にずっと付き添って、様子を見ていました。見ているとすずめは、時折動くものの、与えたご飯粒も食べないし、水も飲みません。小太郎君は心配になったので、せめて水だけでも、と、考えた挙げ句に割り箸の先に脱脂綿を巻つけて、それに水分を含ませ、すずめの口元に持って行ったりもしました。

しかし、すずめにはその力もないようです。
それを見たお母さんが

「小太郎、それは末期の水と言って、ひとが死んだときにするものだよ。お母さんが時々様子をみて上がるから、今日はもう寝なさい」と言いました。

それでもしばらく、小太郎君はその場を離れずにいたのですが、さすがに眠くなったので、

後ろ髪を引かれる思いを残しながら、自分の寢床につきました。

翌朝、小太郎君は目が覚めると、顔も洗うための洗面所には向かわず、真っ先に子すずめのところに飛んでいきました。

動いていないので「おい、おい」と言いながら人差し指で子すずめをつくと、子すずめは、ころん、と上を向きました。小さくて細い両の脚が胴体に引き込まれたように縮こまっています。よく見ると目にも薄皮がかぶって灰色っぽくなっています。

子すずめは、もう死んでいたのです。

雨上がりの朝日の中、学校に行く前に小太郎君は、庭先に園芸用のスコップで穴を掘って子すずめを埋めてあげました。子すずめの亡骸の上に、土を一盛り、二盛りして居るうちに、子すずめの姿はだんだん見えなくなってしまうました。

それから、見よう見まねで小さなお墓に向かって手を合わせたのですが、子すずめは霜の降りた土を被されてさぞかし冷たいだろうと思うと、可哀想で、可哀想で、涙がぼろぼろ出てきました。お父さん雀にも、お母さん雀にも、そして「僕」にも看取られないまま死んだ子すずめが哀れでなりませんでした。

その夜、小太郎君は夢を見ました。

夢の中で小太郎君はお墓に入った子すずめになっていました。夢の中でうつすら目を開けると、その上に土がどさつ、どさつ、と被せられ、次第に身体が重くなると同時に視界も効かなくなつて、そのうちまつ暗になつてしまいました。

まつ暗！何もなし！

小太郎君は恐怖の余り飛び起きました。額に汗をびっしょりかいていました。

その頃小太郎君は、おばあちゃんの部屋で、布団を一枚並べて寝ていました。怖くなった小太郎君は、おばあちゃんの寝間着の袖口を掴みました。それに気づいたおばあちゃんが

「どうした？小太郎」

と訊きました。

小太郎はおばあちゃんの寝間着の袖口を更に強くつかみながら訊き返しました。

「ねえ、死んだら何処に行くの？どうなるの？まつ暗なの？」

「さあね。おばあちゃんもまだ死んだことないから分らんよ。でも、生き物はみんな死ぬから、そのうち、みんなに分るよ。今からそんな心配せんで、子供は、はよう寝んさい」

小太郎君は、おばあちゃんの言葉には全然納得がいきませんでした。

そうしてまるで観念でもしたかのように、

「そっか、やっぱり僕もいつか死んじゃうんだ」

とそころの中でつぶやきました。

そうして、改めて潜った布団の中から、恐る恐る暗闇に包まれた部屋の中を見回すと、暗闇とは言え、闇の中にも濃淡があつて、その輪郭は何となく分りますし、窓の外の夜空との区別も分ります。

しかし、死んでしまつたら、その、闇の濃淡も、窓と空の区別もなくなってしまうのでは

ないか？それこそまっ暗。

いや、まっ暗と感じている自分もないんだから、まっ暗以前のまっ暗。そういうのをなんて言うんだろう。

まず、小太郎君には今ある自分がなくなる、今見ている景色もなくなる、その目もなくなる、なくなるといふのもなくなると言うことがよく呑み込めませんでした。

小太郎君は、それ以上上手く考えられなくなり、だんだん想像がつかなくなっていきました。

そうしてそれを考えれば考えるほど、闇の奥へ、奥へと呑み込まれていき、次第にこの世に引き返してこられなくなるような恐怖を再び感じました。

頭が冴えて眠られなくなった小太郎君は、一晚、まんじりともせず朝を迎えました。

小太郎君は、徐々に朝の薄明かりが増してくる度に、閉ざされた真つ暗な水底から、少しずつほの明かりの指す水面に向かって浮き上がってくるような感触を得ました。しかし、ほの明かりと共に、少しずつ「この世」に戻ってくるのを感じてホッとしながらも、直ぐその後で、何かが追っかけてくるかのように、

「朝がくる。今は毎日、朝がくる。でも死んじゃったら、この朝は来ないんだ。ズーっと、ズーっとまっ暗なまんまなんだ」と言う思いに囚われました。

小太郎君は、それまでの、生まれてから10年の間に、このように言いような不安を覚えたことは未だかつてありませんでした。

それは、お父さんやお母さんに叱られて罰に入れられた時の押し入れの「暗さ」とも違いましたし、授業中、教室内で騒いで、みんなが体育の授業に校庭に出た後も、独り残りで廊下に立たされた時の「ひとりぼっちな感じ」とも違いました。

小太郎君は、それ以降というもの、何をやっても、そうしてそれが上手くいったときほど「でも、どうせいつかは・・・」という説明の付かない不安が必ず、尾を引くかのように残るようになったのです。

そうしてそれ以降、小太郎君は今までのように、たとえ上手くいったとしても、完全に最後まで無邪気に喜び切ることがなんとなく出来なくなっていました。

その後、小太郎君の耳元にはこの「でも、どうせいつかは・・・」と言うこびとのささやきのような声が、いつの間にか住みついてしまい、時に応じて、大きくなったり小さくなったりはするものの、完全にそのささやきを止めてくれることはなくなりました。